

出石町のまちづくりと永楽館の復原

— 歴史社会学とエートス論の視点からの再考 —

小 松 秀 雄

Town Development (*machizukuri*) in Izushi-cho and the Renovation of Eirakukan

— A Reconsideration from the Perspective of Historical Sociology and the Theory of Ethos —

KOMATSU Hideo

要 旨

現在の出石町は兵庫県北部の豊岡市の一部であるが、江戸時代においては出石藩の城下町であった。明治時代後半に開業した山陰本線のルートから外れたため、近代的な地方都市へと発展しなかった。しかし、古い町並みが残された結果、風情のある「但馬の小京都」として高く評価されるようになった。1960年代後半から出石町の住民たちによって出石城の「隅櫓（すみやぐら）」が再建されたり町並みが整備されたりするなど、いわゆる観光まちづくりが進められた。1990年代中ごろには、1年間に約100万人の観光客が出石の小さな城下町を訪れた。さらに、2008年には近畿最古の芝居小屋の永楽館が復原され、それ以来、「永楽館歌舞伎」が秋の恒例行事として続けられている。本論文では、歴史社会学とエートス論の視点から、出石町のまちづくりと永楽館に関する多様な郷土資料を分析し論述してみる。

キーワード：まちづくり、城下町、エートス、永楽館、歴史社会学

Abstract

Izushi-cho, which is now part of the city of Toyooka in northern Hyogo, was the castle town of the Izushi Clan in the Edo period. The Izushi district was not included in the route of the San-in Main Line that was opened in the late Meiji period, and did not develop into a modern local city. However, as the historical townscape has been well preserved in Izushi castle town, it is highly regarded as a tasteful “little Kyoto in Tajima”. From the 1960s, the inhabitants of Izushi-cho reconstructed “Sumiyagura” of the ruined Izushi Castle and improved the historical townscape; this has been called tourism-based community development. In the mid-1990s, about one million people per year visited the small castle town in Izushi. In addition, Izushi Eirakukan, which is the oldest make-shift playhouse (Shibaigoya) in the Kinki region, was renovated in 2008, and since then the “Eirakukan Kabuki” event has been held each autumn. This paper analyzes and discusses various local materials on town development (*machizukuri*) related to Izushi-cho and the Eirakukan from the perspective of the historical sociology paradigm and the theory of ethos.

Keywords: *machizukuri*, castle town, ethos, Eirakukan, historical sociology

はじめに

現在の兵庫県豊岡市出石町の中心地域は、1615年（元和元年）の一国一城令により但馬地方で唯一の城が認められ、江戸時代の出石藩の城下町として繁栄した場所である。明治時代になってから山陰本線などの鉄道路線から外れ、平成の大合併前の豊岡市のように近代的な地方都市へと発展しなかったものの、古い町並みが保存された、風情のある「但馬の小京都」として独自の道を歩んできた¹⁾。1960年代後半から出石町の住民たちの発案で出石城の隅櫓（すみぐら）の再建や町並みの整備などの観光まちづくりが始まり、ユニークな皿そばなどの観光資源が注目され、観光客が右肩上がりに増えていった。そして1990年代中ごろには、交通が不便な人口5千人ほどの旧城下町に年間約100万人もの観光客が押し寄せた。

観光客が1万人にも満たない1960年代から、100万人前後に達した1990年代まで出石町では住民と行政が連携しながら観光まちづくりを精力的に進めてきた。2005年（平成17年）4月1日、北但馬の竹野町、城崎町、日高町、但東町とともに豊岡市と合併し、出石郡出石町から豊岡市出石町に変更されたが、合併後も観光まちづくりの努力が続けられ、出石の旧城下町の中心地域は2007年12月に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、翌2008年6月に近畿最古の芝居小屋の永楽館が復原された。とりわけ永楽館は復原を祝う8月の柿落大歌舞伎が大成功を収めた後、片岡愛之助を座頭とする知名度の高い歌舞伎役者が定期公演を続けており、注目すべき観光資源となっている。

出石町のまちづくりに関しては、建築や行政、観光などの関係者たちの間で調査が行われ、多くの優れた論考が発表されてきた。それらの成果を踏まえ、『出石町史』や『広報いずし』をはじめとする但馬地方の多様な郷土資料を参考にしながら、出石町のまちづくりと永楽館の復原に焦点を当てて歴史社会学とエトス論の視点から再考してみたい。

1 出石町のまちづくり

出石町のまちづくりは、自他ともに認める観光まちづくりであり、「住んで良し、訪れて良しのまち」をつくる取り組みではあるが、必ずしも観光にこだわるまちづくりとはいえない。1980年代から続けられ、2000年代になって国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されるまでの歩みには、自分たちの住む町を可能なかぎり「住みやすく良いまち」に仕上げたいという「誇りと心意気」が感じられる。それは、18世紀後半から出石藩の藩校弘道館で培われ受け継がれてきたエトス（ethos）と呼ぶべき、出石の人びとの「実践倫理的行動様式」である²⁾。後述の静思塾に参加した出石町内会員に見て取れる「誇りと心意気」（エトス）である。それも含めて第1章では、出石の人びとの「誇りと心意気」（エトス）に基づく出石独自のまちづくりの特徴を歴史社会的に考察してみよう。

(1) 出石町のまちづくりの歴史的基盤

出石の旧城下町の北約2kmには古代の但馬の一宮だった出石神社、ならびに、中世において強大な勢力を誇った守護大名の山名氏によって築かれた此隅山城がある。戦国時代末期に羽柴（豊臣）秀吉の第一次但馬侵攻の結果、1569年（永禄12年）に此隅山城は落城した。その後、山名氏は南に移動し、近世の出石城の地となる有子山の山頂に山城を築いたが、秀吉の第二次但馬侵攻によって1580年（天正8年）に攻め滅ぼされた。そして、有子山城の落城から20年余り後、徳川幕藩体制初期に出石城主となった小出吉英（1587-1666）によって有子山の麓に城と町が造られた。17世紀における出石城下の町の基本的形態、すなわち枡形虎口（ますがたこぐち）が約400年の時を超えて、現代に至るまで受け継がれている³⁾。

小出氏の時代も9代目の英及（ふさつぐ）に跡継ぎがなかったため終わり、藩主は短期間の松平氏を経て1706年から仙石氏へと交替するが、江戸時代前半に小出氏によって造られた出石藩の体制と城下町の基盤は、しっかりと継承されていった。ここで注目しておきたい点は、出石藩主の松平氏と上田藩主の仙石氏の交替に際して、仙石氏が上田藩から家族や主な家臣の他に「そば職人」を伴って出石にやって来たことである。そこから、今では出石の観光資源として最も重要な「名物の皿そば」が生まれたといわれているが、まちづくりの歩みを歴史社会的に再考する本稿では、江戸時代前期から現代までの約300年間にわたる「皿そば」の変遷については割愛したい⁴⁾。また、江戸時代の出石藩と城下町についても必要な範囲で言及するにとどめたい。

その代わり、ここで出石町の歴史的基盤の形成を再検討するために、明治から昭和にかけて出石町の重要な転機となった出来事を取り上げると、①1876年（明治9年）の旧城下町の大火、②1889年4月1日の出石町の成立、③1900年代（明治30年代）における但馬の鉄道ルートの構想と山陰本線の開通、④昭和初期の出石川と谷山川の付け替え工事、⑤戦後の出石町の誕生である。もちろん、他にも出石町の住民にとって忘れられない災害や事件があるかもしれないが、本稿の論点と紙幅の都合で①～⑤に絞り込んだ。①から順番に取り上げるわけではないが、それぞれの出来事の歴史的意味を関連づけながら手短かに考察してみよう。

最初に②と⑤に関連する事項となるが、出石藩時代の出石の城下町と明治時代の市町村制度下の出石町の区別をしておこう。仙石氏が藩主になった18世紀の城下町について、『出石町史 第一巻 通史編上』から該当箇所を引用したい。

城下町は一七町あって、谷山川より内側にあった材木町・魚屋町・八木町・本町・宵田町・田結庄町の六町をまとめて本町とも呼び、これに対し残り新町・宗鏡寺町・寺町・出町・鋳物師町・裏町・川原町・博労町・小御料庄町・七軒町・小人町の一一町を端町といった。⁵⁾

出石の町家は半面農家でもあった。直接農業生産に従事したかどうかは別として、その多くは農地所持者だったからである。端町の人の中には直接農業に携わる者が多かっただろう。出石の町に属する農地を「町分（まちぶん）」と呼んだ。その内訳は図40・表80（本稿では省略）にまとめたが、大きく三つに分かれていた。出石町分・水上村・弘原町分である。⁶⁾

ここで取り上げた18世紀の城下町の地名や町割は明治維新後の廃藩置県と市町村制度の施行の過程で少しずつ変更されながら、1889年4月1日に出石町が成立した。『出石町史 第二巻 通史編下』における「地方自治制度の確立」の該当箇所に基づき、出石町に含まれる区域を挙げると次の二十一町になる⁷⁾。谷山町、伊木町、材木町、内町、八木町、魚屋町、入佐町、東条町、本町、宵田町、鉄砲町、田結庄町、川原町、柳町、小人町、松ヶ枝町、馬場町、谷山分、寺町分、出石町分、弘原町分（一部）。⑤と関連づけて述べると、明治時代に成立した出石町、小坂村、室埴村、神美村（一部）は太平洋戦争後、1957年（昭和32年）9月1日に合併して新しい出石町が生まれた。出石藩の出石の城下町と、明治時代に成立した出石町とは多少の町名の変更はあったとはいえ、区域としてはほぼ重なっており、戦後の合併までは持続していたが、小坂村、室埴村、神美村（一部）と合併した後は町域が大幅に拡大された。藩政時代から戦後の合併前までの出石町は8平方キロメートルほどの小さな面積しかなかったのに対し、合併後は91平方キロメートルへと約11倍の面積の町になった。「但馬の小京都」として戦後の観光まちづくりの対象になった区域は、出石藩時代から持続した旧城下町であり、周囲の有子山や出石川を含めても3キロ四方にも満たない範囲である。

さて時代は①の明治初期の出来事に戻るが、昭和の大合併まで続いた出石町の旧城下町は、1874年3月26日夕方に発生した火災によって中心地域の約三分の二が焼失するという未曾有の災害に見舞われた。出石藩の記録では江戸時代を通じて出石城下の町では火災が発生することは珍しくなかったけれども、「明治九年の出石大火事」は「出石城下成立後最大の火災であった」⁸⁾。廃藩置県に続く大火によって出石から離れる人びとも少なからずいたけれども、但馬地方の雄藩であった出石藩の城下の町に対する「誇りと心意気」（エートス）なのだろうか、出石にとどまった人びとは焼けた大半の町家や建物を近代的な建築様式ではなく、昔ながらの様式で再建した。

明治初期の大火後に旧城下町は復興を成し遂げるが、1900年代（明治30年代）になり③の出来事に直面する。日本の富国強兵と近代化の一環として全国に鉄道網が敷かれることになるが、京阪神地区から日本海方面に延びる鉄道の構想として、但馬に向かうルートをめぐる複数の案が浮上した。紙幅の都合上、結果だけを取り上げると、福知山から豊岡を通して山陰地方に向かう山陰本線から出石は外れ、近代的な鉄道網から取り残されてしまった。出石町にとっては大火災に続く打撃となり、但馬地方の中心は出石藩の旧城下町から豊岡駅のある町へと移ってしまった。その後、豊岡の町は1925年（大正14年）5月に発生した北但大震災によって大きな被害を被ったけれども、豊岡駅前通りの中心地域は近代的な耐火・耐震建築に造り直され、名実ともに但馬地方の近代的な都市に生まれ変わった⁹⁾。それに対し、北但大震災の被害を免れた出石町は、鉄道網から外れたために「近代的な駅前再開発」が行われることもなく、明治初期の大火後に再建された町並みが持続した。皮肉なことに、明治の大火や大正末期の大震災の後に近代的な町並みに造りかえられずにいた結果、1960年代以降の観光まちづくりで「但馬の小京都」というキャッチフレーズで「江戸時代の城下町の風情を伝える町並み」を前面に打ち出すことができるようになった。

これまで述べたように、出石の城下町では明治以降、近代化のための大規模な再開発事業は

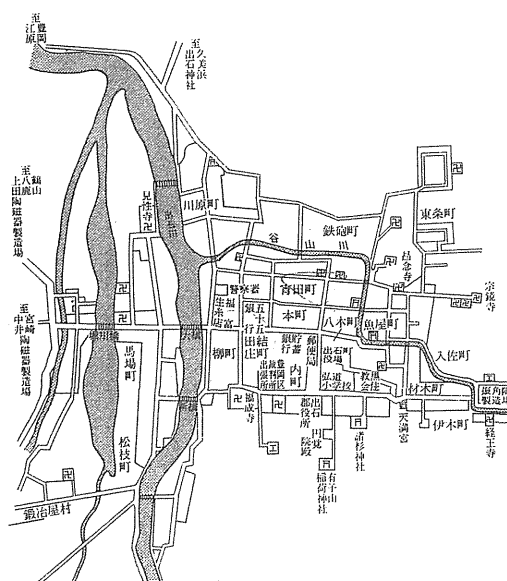


図1 改修前の出石川・谷山川

(注) 『出石町史 第二巻 通史編下』では『木戸公松菊公遺芳集』を参考にして作成された図であり、明治末期のものとして推定している。木戸孝允(桂小五郎)は明治維新の時代に出石の城下町に潜伏しており、その記念碑がある。

[出所] 『出石町史 第二巻 通史編下』(580頁)。注は筆者が作成した。

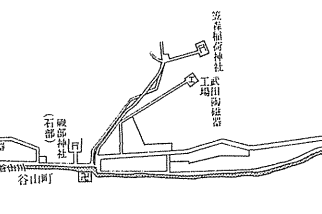
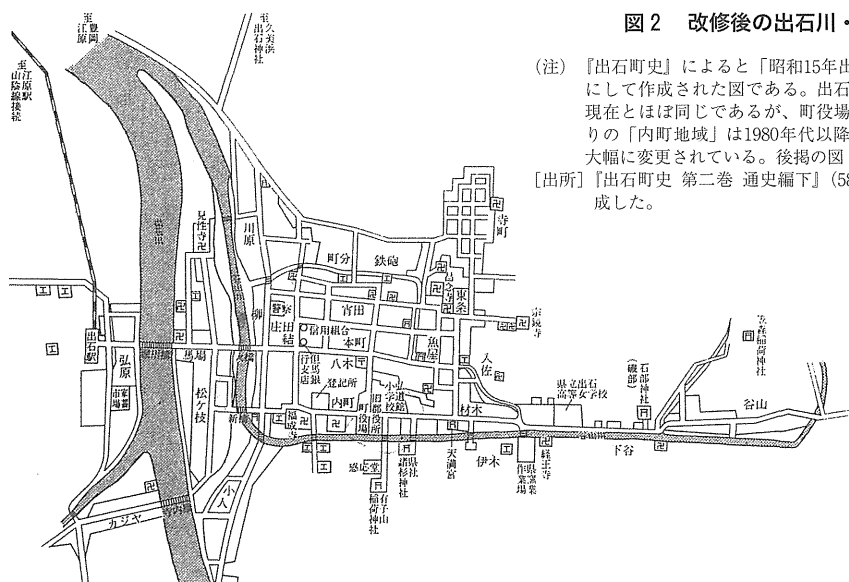


図2 改修後の出石川・谷山川

(注) 『出石町史』によると「昭和15年出石町勢一班」を参考にして作成された図である。出石川と谷山川の流れは現在とほぼ同じであるが、町役場や弘道館小学校あたりの「内町地域」は1980年代以降の整備事業によって大幅に変更されている。後掲の図3も参照のこと。

[出所] 『出石町史 第二巻 通史編下』(580頁)。注は筆者が作成した。



実施されなかったが、昭和恐慌に対する「時局匡救土木事業」の一環としての円山川改修工事にともない、1931年から1938年まで④の出石川と谷山川の付け替え工事が行われた。図1と2のように、出石川の支流の谷山川は出石城の外堀として城下町の北部の鉄砲町から東側の町を貫流していたが、出石城の二の丸下から城下町の西部の外側を流れる形に付け替えられた。出石川と谷山川の水害から城下町を守るための付け替え工事であり、さらに但馬最大の円山川から流域の市町村を守るための改修工事であった。注目すべき点は、出石川と谷山川の付け替えは行われたけれども、城下町内の町並みと建物はほとんど変わらず維持されたことである。その結果、既述のように「但馬の小京都」として江戸時代から明治時代の古い町並みと数多くの建物が現代まで続いている。

(2) 1980年代からの出石町のまちづくり

1957年9月1日、出石町は隣接する3つの村と合併し、旧出石町の約11倍の面積を有する新しい出石町になり、人口は5千人台から1万3千人台に増えたとはいえ、約2.5倍ほどの増加にとどまった。北但大震災時に3万人規模になっていた豊岡町は1950年4月1日に市制を施行し、4万人を超える、但馬一の近代的な地方都市に変貌したのに比べると、但馬地方最大の城下町として栄えた出石町の停滞ぶりは地元の住民たちにとっては憂うべきことであった。そのような状況から出石町の戦後のまちづくりはスタートした。

出石町のまちづくりの資料を読むと、江戸時代の出石城下の繁栄を再生したいという「誇りと心意気」(エートス)を感じ取れるが、1962年10月に出石町観光協会が設立され、「出石の観光」を売り出す本格的な活動が始まった。試行錯誤をくり返す過程で1968年に出石城隅櫓が復元されたとはいうものの、当時の観光入込客数は1万人前後にとどまっていた。1970年4月に観光協会を改組し幅広く住民の中から有志を募り、行政主導ではなく町ぐるみで観光事業に取り組むことになり、当時のディスカバー・ジャパン(日本再発見)の潮流にも乗って「但馬の小京都」と大々的に宣伝された出石の旧城下町を訪れる観光入込客数が急増していく¹⁰⁾。1970年代終わりには50万人を超え、1980年代に入っても右肩上がりの勢いは止まらず、出石は但馬有数の観光地として主要な旅行雑誌にも登場するようになった。戦前から有名な城崎温泉や日本三景の天橋立が出石町の東西に控えているので、城崎や天橋立などを目的とする多数の観光客が途中で「但馬の小京都」の出石にも立ち寄るようになったためだろうか。出石の町に多くの人びとをひきつける魅力がなければ、5千人規模の小さな城下町に50万人以上の観光客は来ないだろう。

出石の町の魅力を語る観光パンフレットや旅行雑誌などには、江戸時代から受け継がれている町並み、出石城や辰鼓楼、町家や寺社、皿そば、出石焼、四季折々の行事などが紹介されている。これらの目に見える観光資源に加えて、近世以来の出石城下の歴史によって育まれた住民たちの「誇りと心意気」(エートス)があってこそ、「但馬の小京都」の言葉に集約されるような出石の魅力が生み出されている。ここでは観光まちづくりという言葉にこだわらずに、出石の町の多様な資源を活性化するために進められた、1980年代から90年代前半のまちづくりを中心に上げてみたい。

1983年に旧城下町の南西地区の中村に静思堂(斎藤隆夫記念館)が造られ、静思塾が開校された。全国各地で多数の建物や街並みを設計した宮脇檀(1936-1998)が出石で初めて手がけた建築物であり、この後、町立伊藤美術館(1990年)、役場新庁舎(1993年)、出石中学校(1999年)の建物を設計すると同時に、出石の内町都市核形成計画(1987年策定)などの各種の計画や整備事業にも参与した。宮脇設計の静思堂で開校した静思塾の塾長は政治評論家の草柳大蔵(1924-2002)であり、塾の例会にはまちづくりや建築などの分野の著名人が招かれ地元の有志と活発な議論が展開された。静思堂の建築地点は、明治から戦後まで反骨の政治家として活躍した斎藤隆夫(1870-1949)の生まれ故郷であり、斎藤に陶醉した草柳が建築家の宮脇に依頼して静思堂が建てられた。静思堂における静思塾の例会については、1985年1月に創刊された定期刊行物の『静思塾報』に記録されており、1999年12月に刊行された最後の『静思塾報』第

17号』までの間に77回の例会が開催された。創刊号の『静思塾報』には会員名簿が掲載されているが、草柳や宮脇らの特別会員8名、出石町内の会員90名、但馬地域の町外会員20名となっており、多数の町内会員が静思塾に参加したことが分かる¹¹⁾。

『静思塾報』の最終号の表紙には斎藤隆夫の次のような文章が引用されている。「日本精神とは、一名、武士道の精神である。武士道の精神は正義の為には飽くまでも戦ふ精神であり、人間としての恥を知るの精神である。(後略) 一昭和16年6月 政治論集より一」。斎藤の言葉には藩校弘道館の精神が表現されており、静思塾の長期間の例会を通じて多数の町内会員にも弘道館の精神がしっかりと受け継がれたのではなかろうか。このように、東京などの大都市で精力的に活動していた草柳や宮脇などの外部の強力な人格（いわゆるカリスマ的人格）によって触発される形で、静思塾という場で出石の住民たちの「誇りと心意気」（エートス）が活性化され、1980年代から旧城下町の各種の計画や整備事業が進められた。

1980年代から90年代前半までの『広報いずし』には、そのつど出石の重要なまちづくりの特集が組まれ個々の計画や事業の詳細について分かりやすく説明されている。紙幅の都合で中枢的意義を持つ内町都市核形成計画と HOPE 計画の重要な点だけを取り上げておこう。

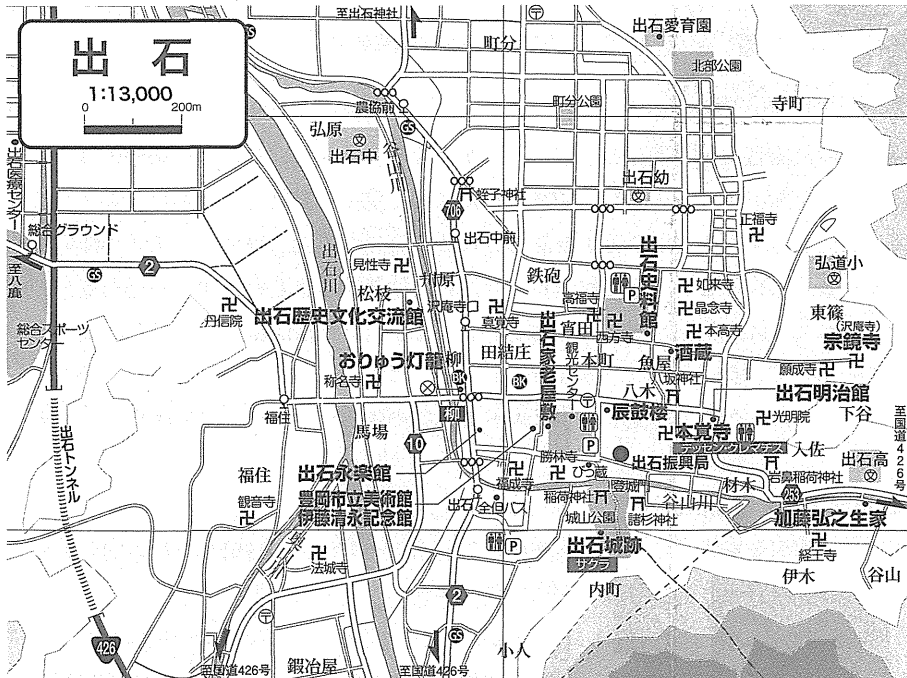
まず内町都市核形成計画は、その名称が示すように有子山裾野の出石城と旧城下町の結節点となる内町地域を核として整備することによって旧城下町全体を再生するプランである。『広報いずし』から内町都市核形成計画のポイントとなる箇所を引用しておこう。

町立美術館の建設にともなって、家老屋敷周辺も整備します。昨年度に策定した内町都市核形成計画に基づくものです。計画は、辰鼓櫓や家老屋敷などこの地域に残されている歴史的な資源に、新しい機能を加えた施設や空間をつくり、より出石らしい雰囲気をかもし出そうというもの。(中略) 出石幼稚園の跡地も含めて、ここを観光広場として整備する予定にしています。(中略) 計画では、道路の整備も予定しています。(中略) 計画達成には、今後約十年の年月が必要だと思われます。しかし、十年後、この地域は出石のシンボルゾーンとして魅力あふれる場所に変身していることでしょう。¹²⁾

30年ほど前の計画に基づく整備事業の結果、「内町都市核」(図3の真ん中のやや下)に該当する地域には既存の辰鼓櫓や家老屋敷に加え、出石観光センター、出石総合支所、大手前広場、(旧町立)伊藤清永美術館などが造られ、今では出石の旧城下町や観光やイベントの拠点の機能を果たしている。そして、出石独自の内町都市核形成計画は、1987年の兵庫県による「都市景観形成地区」指定、1989年の国による「都市景観モデル都市」指定などとも関連づけられ、出石らしい景観をかたちづくるための柱にもなった。

次に HOPE 計画に目を移すと、まちづくりが「まち全体」に力点を置いた計画や事業であるのに対して、HOPE (Housing with Proper Environment) 計画(地域住宅計画)は、文字通り地域固有の環境に適した個々の住民の住まいづくりに配慮するものである。1983年に建設省(現在の国土交通省)の補助事業として始まった、地域の住まいづくりを推進する住宅計画であり、出石町でも1989年に HOPE 計画が策定された。『広報いずし』にも住民向けの分かりやすい記事がくり返し掲載されているが、ここでは1990年8月号の「住んでよかったといえるま

図3 現在の出石城下町の観光ガイドマップ



(注) 2017年6月に刊行された最新版の観光ガイドマップである。原本はカラー刷りであり、主な観光スポットは太い赤字で書かれている。

[出所]「豊岡市観光ガイドマップ」(豊岡市役所大交流課)。注は筆者が作成した。

ちづくりを目指して」というテーマの特集から重要な箇所を引用する。

町が、昨年度から策定作業を進めていた「HOPE 計画（地域住宅計画）」が、このほどまとまりました。古い家並みが軒を連ね、歴史的な面影を色濃く残す出石の町並みや農村集落を形成する伝統的な出石の住宅様式を大切にしながらも、より住みやすく暮らしやすい住宅づくりを進めることを目的としたものです。(中略) HOPE 計画では町家の新築・増改築時のモデルプランを策定、平成二年度には町家修復デザインマニュアルを作成する予定です。(中略) HOPE 計画（地域住宅計画）が対象とするのは、その大部分が住宅の所有者である個人であり、計画のほとんどはひとつの提案にすぎません。¹³⁾

この引用文の中にも出てくる町家修復デザインマニュアルは、予定よりも少し遅れて1992年3月に『伝統的町家建築の意匠構成の手引き（町家デザインマニュアル）』という題名の小冊子で刊行された。町家の復元・改修、町家のデザイン修復、伝統的町家建築の意匠の項目について、多様なカラー刷りの図表や写真を駆使した丁寧な手引きに仕上げられており、25年経過した現代に至るまで大きな変更もなく活用されている。まさに出石町固有の環境に適合したHOPE 計画の結晶ともいえよう。

1980年代から旧城下町を中心とする出石町のまちづくりは、主に「まち全体」を対象とする各種の計画と、住民個人の住宅を対象とする HOPE 計画とを両輪として進められ、多種多様な事業が実施されてきた。それらの計画や事業は、観光まちづくりに集約できない広い視野に

立脚した総合的なまちづくりであった。

2 永楽館の復原 ～近畿最古の芝居小屋の再生～

1990年代から2000年代にかけて出石町のまちづくりの難しい論点になった問題として永楽館の復原と伝統的建造物群の保存を挙げることができる。後者の問題は、豊岡市との合併から2年余り経過した2007年（平成19年）12月4日に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された後、関連する条例や規則に基づき対応されることになった。前者の永楽館の問題については、2008年6月に復原という目的が実現された後、歌舞伎をはじめとする多様な催しの会場として活用されている。「重要伝統的建造物群保存地区」の問題は建築学の専門的なテーマであるため差し置いて、第2章では、永楽館の創建から復原までの歩みと復原後の状況について、関連資料を手がかりとして歴史社会学とエトス論の視点から考察してみよう。

（1）但馬地方と農村歌舞伎

出石城下で紺屋業を営んでいた小幡家の11代目当主の久治郎が1901年（明治34年）に永楽館を創建したが、それよりも27年ほど前に10代目久治郎が農村舞台を建てた。大変に興味深い内容が『出石町史 第二巻 通史編下』に書かれているので引用する。なお、引用文は、1815年（文化2年）から記録された小幡家の『萬曆家内年鑑』に依拠して『出石町史』の執筆者がまとめた箇所である。

第一〇代久治郎（一八九五年〔明治二八〕没、五一歳）が非常に芝居好きの人物であり、一八七四年（明治七）五月に出石城二の丸廃材を用いて農村歌舞伎舞台を造営した。これが永楽館の創始で、農村歌舞伎の「手辺座」（花谷一座）を雇ったり上方芝居を引いたりして興行した。一八八三年（明治一六）には、播磨国加西郡東高室村の小倉六太郎外九名を雇い入れ五日間興行した記録がある。一八八六年（明治一九）九月には、「芝居衣裳、豊岡骨柳屋ト浅倉村（現日高町）田中、二家ノ衣裳買求メ貸衣裳ヲハジム」とある。この時以降衣裳類の蓄積が始まった。¹⁴⁾

永楽館が創建された歴史的背景に関する重要なポイントが引用文の中に書かれている。まず芝居好きな紺屋業者が豊かな資産を使って出石城下に農村歌舞伎舞台を造り、但馬の手辺座や播磨の高室芝居、あるいは京阪神の上方芝居を雇い興行した。さらに豊岡や日高など近隣の町村から芝居衣裳を買い集め、貸し衣裳の仕事も行っていた。出石城下の10代目小幡久治郎が芝居好きになった背景には、多数の農村舞台が造られ農村歌舞伎が頻繁に行われた但馬や播磨の独特な風土があり、また農村歌舞伎が盛んだった地域だからこそ、芝居の衣裳も豊富に存在していたものと推測できる。1983年（昭和58年）に兵庫県立歴史博物館で播州歌舞伎の特別企画展が開催された時に、出石町の小幡家から何点もの歌舞伎衣裳が出品されたことから、歌舞伎に対する小幡家の熱意やこだわりが分かる。

10代目久治郎が興行を依頼した手辺座は出石藩の小出氏や仙石氏にも縁が深かった農村歌舞伎の専従の役者集団であり、出石藩の手辺村（現在の豊岡市日高町国府地区府市場）を拠点と

して但馬全域で芝居の興行をくり返していた¹⁵⁾。関連資料によると、出石藩祖の小出氏お抱えの能役者だった花谷福太夫が17世紀ごろ、出石藩領の手辺村に住まいを定めてから、歌舞伎も演じられる一座（手辺座または花谷座）を結成し、小出氏から仙石氏に藩主が交替した後も出石城下に招かれ定期的に歌舞伎をはじめとする様々な演芸を披露していたという。ただ、『出石町史 第一巻 通史編上』の近世の娯楽を取り上げた箇所に「表105 文化12～文政2年の興行一覧」と説明文があり、いずれの興行も寺院や川原の空き地などに仮設の小屋を建て実施されており、19世紀前半の出石城下には常設の芝居小屋はなかった¹⁶⁾。

前記の引用文では、10代目久治郎は1895年に51歳で亡くなっているから、生まれたのは1840年代であり、手辺座や高室芝居の他に但馬の葛畑地区などでも農村歌舞伎が盛んに行われていたところである。出石町の東隣の但東町（現在の豊岡市但東町）には1990年代末まで多数の農村舞台が残っているのに対し、旧出石城下町には農村舞台の残存が確認されていない。農村歌舞伎の全盛期に人生を送った10代目久治郎が芝居好きになったけれども、身近な場所に常設の農村舞台や芝居小屋がなかったために自分の資産を使って出石城下に農村舞台を建てたことも考えられる。10代目久治郎によって1874年5月に造られた農村歌舞伎舞台は「和楽亭」と呼ばれ、「永楽館の創始」と位置づけられているが、正確には「永楽館の前身」である。ただ、関連する図面や詳しい文書も残されていないので建設地点や大きさや形態も不明である。江戸時代以来、現代に至るまで小幡家の住居は出石城に近い田結庄町にあり、出石城の二の丸の廃材を使用したこと、ならびに小幡家が出石城の敷地の一部を所有していたことから現在の出石城跡内に「和楽亭」が造られたのかもしれない。あるいは、大半の農村舞台が神社境内や隣接地に建設されたことから推測すると、出石城跡内の諸杉神社境内もしくは隣接地あたりだったとも考えられる。

（2）永楽館の創建と紆余曲折

農村歌舞伎舞台「和楽亭」の問題については、図面や文書が残されておらず、また『出石町史 第二巻 通史編下』でも引用文以外の説明もないので今後の研究課題とし、現代の永楽館の創建と紆余曲折の問題を取り上げてみたい。前節（1）と同様に、『出石町史 第二巻 通史編下』から創建の該当箇所の引用から考察を始めよう。

現在の永楽館の建物を新築したのは、小幡家一代目久治郎（一九二八年〔昭和三〕没、五五歳）で、大工棟梁岩瀬由松、親戚橋松蔵と諸協議の上建設に着手、一九〇〇年（明治三三）十一月三〇日起工式挙行、翌一九〇一年二月一三日服部一三兵庫県知事より定設（常設）劇場新設の許可を得、同年六月二六日に劇場開演式を挙行了。以来引き続き興行、「此年興行盛流行ス」とある。¹⁷⁾

「和楽亭」を建てた10代目久治郎は1895年に亡くなったが、その6年後の1901年、なぜ11代目久治郎が自宅の隣接地の柳町に永楽館と名づけられた全蓋式の芝居小屋を造ったのか。『出石町史』や『永楽館 復原の軌跡』などの最も信頼できる重要な郷土資料から明確な答えを引き出すことはできない。そこで、当時の時代の流れや他の地域の関連資料を手がかりにして再

検討するが、明治中ごろから神社付属の農村舞台とは異なる全蓋式の芝居小屋が、商業劇場として繁華な街中に造られるようになる。芝居に対する10代目の熱意やこだわりを11代目久治郎が受け継いだのだろうか、明治近代の新しい流れに寄り添うように個人的資産を使って全蓋式の芝居小屋を創建した。永楽館という名称は、小幡家の当主が藩主の仙石氏の家紋である「永楽通宝」にちなんでつけたといわれている。地盤沈下した小さな城下町にとっては、有り難い商業劇場となり、『永楽館 復原の軌跡』によると創建から大正中ごろまで約20年間は芝居を中心に興行の盛況が続いた。

明治から大正時代にかけて全国各地に建設された大半の全蓋式の芝居小屋が、活動写真やトーキー映画が導入されるにつれ曲がり角を迎えることになる。永楽館も歌舞伎を中心とする芝居や演芸だけでは経営を続けることは難しくなり、本格的な映画の時代に対応するため昭和初期に映写室を設置した。秋田県小坂町の康楽館、香川県琴平町の新丸座、愛媛県内子町の内子座、熊本県山鹿市の八千代座の歩みを参照すると永楽館の紆余曲折の過程は次のように区分できる。①創建から大正末まで、②昭和初期から終戦まで、③昭和20年代から30年代まで、④昭和40年代から60年代まで。『永楽館 復原の軌跡』に①から④までの時代に該当する多様な資料が掲載されているので、ここでは要点を取り上げるとどめる。

①は創建時の芝居小屋の看板が通用した良き時代であり、3月の出石の初午大祭などの大きな年中行事の期間は町の賑わいそのままに、芝居を中心とする興行が好成績を収めた。大正中ごろから活動写真が永楽館の興行にも登場するようになり、1930年に本格的な映写室が設置されてからは興行面では芝居小屋から映画館へと様変わりする。②の時代は日中戦争から太平洋戦争までは戦時体制下であり、永楽館でも映画や芝居だけでなく、戦争に関連する各種の行事が開催された。終戦後、③の時代は映画が日本人の国民的娯楽に変わり、永楽館でも映画館としての機能が前面に押し出され、松竹や大映や東宝の映画のポスターばかりが目立ち、芝居小屋とはいえなくなってしまった。

映画が娯楽の王様として君臨した時代も約20年ほどで終わり、昭和30年代後半からテレビが日本の家庭に普及すると映画館に足を運ぶ人は急減し、各地の映画館は次々と閉館していった。写真1のように、1964年に映画館の使命を終えた永楽館は芝居小屋に復帰することもなく、閉館された。④の時代に入り、昭和40年代初めにパチンコ業者に貸し出され、出入り口と後部座席の一部だけが一時的にパチンコ店に作り替えられたこともあったが、営業が継続できず、昭和40年代後半からは所有者の小幡家の「倉庫」となった。2005年以前の出石町の住宅地図には「永楽館」の名称はなく、「倉庫」または「ソーコ」の言葉しかないが、2005年以降の住宅地図には「永楽館」の名称が登場する。小幡家の当主や関係者に直に聞き取りすることができず、また関連する郷土資料も得られなかったため、④の時代における「倉庫」がどのようなものであったのか、現時点では分からない。

写真1 復原前の永楽館



(注) 1964年に閉館された永楽館の姿であり、道路側の入口にアルファベットの大字でEIRAKUと書かれている。なお、出所の資料は写真集であり、頁の番号がない。

〔出所〕松竹関西演劇部・豊岡市編『近畿最古の芝居小屋 出石永楽館』。注は筆者が作成した。

(3) 永楽館の復原と多様な活用

1987年に出石町で開催された「第1回兵庫町並みゼミ」で永楽館が取り上げられたことを転機として永楽館に対する出石住民の見方が変わった。そして、翌1988年10月、永楽館の復原と活用を目ざすために地元の建築家をはじめとする有志が集い、「出石城下町を活かす会」が発足した。この会には、1984年に開校された静思塾の多数の町内会員が参加しており、静思塾を通じて活性化された出石の人びとの「誇りと心意気」(エートス)が原動力となったといえよう。また、1985年前後は各地の古い芝居小屋の復原・再生がテレビや新聞などのメディアで頻繁に報道され、近代的な文化ホールや劇場とは違う芝居小屋独自の価値が見直され、地方の小さな町でもまちづくりの重要な資源として活用する動きが活発になっていた。昭和40年代後半から「倉庫」として放置され、詳しい住宅地図にも名前がなかった永楽館を復原しようとする取り組みが昭和の最後の年に始まった。

静思塾の町内会員を主体とする「出石城下町を活かす会」が永楽館の復原の取り組みを担うことになったとはいえ、復原されたのは2008年であり、まさに試行錯誤と苦難の連続であり、20年という長い歳月を要した。復原した2008年に刊行された『但馬の情報誌 T2 (ティーツー)』(67号)に「華やかな芝居小屋がこの夏蘇る 永楽館復原への挑戦」というタイトルの4ページほどの記事が掲載されたが、主な担当者の言葉を交えて試行錯誤と苦難の過程が具体的に書かれている¹⁸⁾。この記事に加えて、他の関連資料や筆者の聞き取りを参考にしながら20年間のいばらの歩みを手短かにまとめてみよう。

古い大規模な建築物を修繕したり復原したりするためには多額の資金が必要であり、個人が

用立てることは難しく、国や地方自治体や企業などが補助金や寄付金を出さなければ放置されたままになるだろう。個人ではなく団体の所有物であって、しかも国や地方自治体の文化財に指定されていると相応の補助金や寄付金も得られるかもしれないが、永楽館は小幡家の所有物であり文化財に指定されていたわけではなかったから、手始めに所有権の移転と文化財指定という難題を解決しなければならなかった。そこで、小幡家と交渉して所有権を出石町に移すとともに、出石町役場に働きかけて文化財に指定してもらうために「出石城下町を活かす会」のメンバーは懸命に努力した。

その取り組みと成果をピンポイントでたどると、1992年3月に永楽館再生計画書を作成し、町役場に提出したが、その際には本格的な復原工事の計画書ではないが、建築面での復原・再生の見通しも添えられた。また、全国芝居小屋会議の会員となり1994年に内子座で開催された会議から定期的に参加するようになり、さらに八千代座の修理現場を視察したりと復原に向けて実践的知識と技能を身につけるための活動を続けた。「出石城下町を活かす会」の努力が実って、1998年に小幡家から永楽館の建物が出石町に寄付されると同時に町指定の文化財となり、翌1999年から復原整備検討委員会を開催し、復原に向けての調査と設計を開始した。ところが、永楽館の復原場所をめぐる論争が町議会で起こり、出石町が関連する事業の凍結を発表したことによって復原の歩みはストップした。『広報いずし』にごく簡単な説明はあるものの、詳しい経緯は公表されていないため、筆者の聞き取りで具体的な内容を知ることができたが、諸般の事情を考慮し、論争と事業の凍結があったこと、最終的には創建場所で復原することになったことを指摘しておくにとどめよう¹⁹⁾。

永楽館の建物の町への寄付と文化財指定に続いて、2002年に現存の場所で復原する方針にそって出石町は永楽館の土地を購入し、一時凍結した事業を再開することで決着がついた。現存の場所での復原が決まってからは定期的に永楽館コンサートが開催されると同時に、「出石城下町を活かす会」と地元の「女性たちのまちづくり会議」が呼びかけて永楽館の片づけと清掃が行われた。豊岡市と合併した後の2007年から豊岡市の主要な整備事業として復原の再調査と再設計に基づき工事に着手し、2008年6月に工事が完了した。写真2のように、同年8月に5日間にわたり柿落大歌舞伎が開催され、大成功を収めた。

柿落大歌舞伎の終了後、(株)出石まちづくり公社の主な事業として永楽館が運営され、歌舞伎や落語や狂言の定期公演の他に、多種多彩な団体のイベントが開催されている。公演やイベントがない日は定休日を除き、入場と見学が可能であり、出石町を訪れた観光客の重要な観光スポットになっている。2010年から2016年までの有料の入館者数の記録によると、個人と団体に区別されるが、大口の団体数によって左右されるため団体の入館者数は年度によって変動が見られるものの、個人の入館者数は8,500人台から17,000人台へと順調に増えている²⁰⁾。永楽館の知名度のアップに最も貢献しているイベントは永楽館歌舞伎であり、2008年8月の第1回から2年間は8月に開催されたが、2010年からは出石の秋の恒例行事として11月に定着した。第8回(2015年)の開催時に入場者全員に対して配布された「永楽館歌舞伎のアンケート」の結果を見ると、13回公演の総入場者数は4,244人であり、座席定員充足率は98%に達し、毎回ほぼ満員という盛況になった。残念ながらアンケートの回収率は15%(636人)であるが、非

写真2 復原後の永楽館



(注) 2008年に復原された永楽館の姿であり、永楽館歌舞伎の座頭を務める片岡愛之助の幟旗などが見える。なお、出所の資料は写真集であり、頁の番号がない。

〔出所〕松竹関西演劇部・豊岡市編『近畿最古の芝居小屋 出石永楽館』。注は筆者が作成した。

常に興味深い結果が出ており、地元の豊岡市民が18%であるのに対し兵庫県以外の者が約54%を占め、特に関東からの入場者が60人もいた²¹⁾。

2005年に出石町が豊岡市と合併した後、豊岡市の主要な整備事業として多額の予算に基づき永楽館は復原され、2008年度の市政10大ニュースにリストアップされた。その後も『広報とよおか』には永楽館の主なイベントは掲載され、とりわけ永楽館歌舞伎については、そのつど公演日程や演目や配役の紹介記事などが掲載されるとともに、毎回のよう終了後は歌舞伎の舞台の写真が表紙を飾っている。今では永楽館は出石の旧城下町と豊岡市の最も重要な文化資源となっている。

おわりに

本稿の第1章で論述した出石町のまちづくりのテーマについては、主として観光まちづくりの視点から地元の人びとによる実践的な報告が発表され、また、外部の様々な分野の調査研究も行われ論文や報告書などの成果が刊行されてきた。後半の第2章で取り上げた永楽館の復原についても、地元の関係者たちが『永楽館 復原の軌跡』や雑誌の記事などに苦難の過程についてまとめており、外部の人びとも芝居小屋や永楽館歌舞伎をテーマにエッセイや論文を書いている。本稿では、これまで余り取り上げられていない『広報いずし』や『広報とよおか』や『静思塾報』などの郷土資料、および地元の関係者の聞き取りに基づき、歴史社会学とエートス論の視点から出石町のまちづくりと永楽館の復原の問題を再考してみた。今回は「重要伝統的建造物群保存地区」などの建築学的問題については論述を保留したり、あるいは、永楽館の

創建や歩みなどについては資料不足で不明な点を課題として残したりしたので、今後も可能な範囲で調査研究を続けたい。

なお、出石町では2014年11月と2016年11月の現地調査に引き続き、2017年7月3日から7日までヒアリングと資料調査を実施したが、(株)出石まちづくり公社の古田清久氏、出石振興局の大岸勝也氏、出石城下町を活かす会会長の福岡隆夫氏、永楽館館長の赤浦毅氏には貴重なお話しをお聞きすると同時に、多数の関連資料をいただき、改めてお礼を申し上げたい。

注

- 1) 「小京都」は、町並みや趣が京都に似ている町を示す言葉として使われているが、語源は不明である。1985年（昭和60年）に「小京都」を名乗る地域団体が全国京都会議を結成し、観光面を中心に交流が行われている。出石町も全国京都会議に加盟しているが、1968年11月の『広報いずし』に兵庫県の坂井副知事が出石城隅櫓の完成を祝い、「小京都の風格をいつまでも」という祝辞を寄せていることから分かるように、かなり早い時期から出石町は自他ともに認める「但馬の小京都」として観光宣伝している。
- 2) 出石城下に1775年（安永4年）に開校された藩校弘道館を中心に培われた文武両道の風土から多くの優れた人材が生まれ、出石町の観光パンフレットだけでなく『広報とよおか』でも紹介されている。M. ウェーバー以来、「資本主義の精神」の研究で活用されている、禁欲倫理的行動様式を指示するエートスという言葉を出石の人の「誇りと心意気」に適用してみたい。
- 3) 枳形虎口は織豊系の城砦の特徴といわれるが、皮肉なことに羽柴（豊臣）秀吉に滅ぼされた山名氏の有子山城を教訓にしたのか、小出氏は有子山の麓に枳形虎口の城下町を築いた。有子山を背にして出石城の前には広場（枳形）が造られ、城下町の出入り口（虎口）には見性寺や経王寺や福成寺などの砦がわりの寺院が建てられた。
- 4) 出石町の観光まちづくりの取り組みが本格的に開始された1971年3月の『広報いずし』で、京阪神から東京まで広く知られた出石名物として「皿そば」が紹介されている。ただ、今回（2017年7月4日）のヒアリングで(株)出石まちづくり公社と出石振興局の担当者から資料に基づき、1970年時点の出石皿そば店は「五萬石」、「よしむ」、「南枝小人」、「そば庄鉄砲店」の4店舗しかなかったとの説明を受けた。観光まちづくりの取り組みによって観光客数が急増したため、「皿そば」の専門店が40店舗以上になった。
- 5) 『出石町史 第一巻 通史編上』536頁。
- 6) 『出石町史 第一巻 通史編上』581頁。
- 7) 『出石町史 第二巻 通史編下』197頁。
- 8) 『出石町史 第二巻 通史編下』168～169頁。なお、江戸時代における出石城下の火災については、『出石町史 第一巻 通史編上』887～889頁を参照のこと。
- 9) 北但大震災は明治以後の但馬最大の地震であったけれども、震源地が円山川河口付近であったため、豊岡市中心部と城崎温泉地区は壊滅的被害を受けたが、出石の旧城下町は大きな被害もなく、永楽館をはじめ古い町家や寺社などの建物も倒壊を免れた。
- 10) 1970年の大阪万博閉幕後の旅客の落ち込みを考え、同年10月から国鉄が電通などの広告メディアを総動員して実施したキャンペーンが「ディスカバー・ジャパン」である。副題は「美しい日本と私」であり、1970年代を通じてヒットした。1977年（昭和52年）3月に策定された出石町振興計画の「第3章 第3節 観光の振興」でも、「但馬の小京都」の言葉とともに「ディスカバー・ジャパンの波にのって古い町並みの雰囲気や静かなたたずまいを求める観光旅行のパターン」について言及されている。
- 11) 『静思塾報』の創刊号から最終の17号まで上坂卓雄氏や福岡敏幸氏などのまちづくりに熱心な有志が編集委員として名前を連ね、上坂氏は後に国の観光カリスマ百選に選ばれ、また福岡氏は出石城下町を活かす会会長として永楽館の復原に多大な貢献をした。

- 12) 『広報いずし 283号』(1988年10月) 3頁。
- 13) 『広報いずし 305号』(1990年8月) 2～5頁。
- 14) 『出石町史 第二巻 通史編下』321～322頁。なお、『出石町史』では久次郎という漢字名になっているが、『永楽館 復原の軌跡』に掲載された多数の手書きの申請書類では、小幡久治郎氏が自筆で久治郎と署名しているため、久治郎の漢字名に統一した。
- 15) 手辺座については、『出石町史』よりも、手辺座の拠点となった現在の豊岡市日高町国府地区の郷土資料である『日高町史 上巻』や『国府村誌 中巻』に詳しい記述が見られる。また、手辺座が衰退していく明治以降の歴史については、『兵庫県の農村舞台』にも写真入りの説明がある。
- 16) 『出石町史 第一巻 通史編上』881～882頁。
- 17) 『出石町史 第二巻 通史編下』322頁。
- 18) 『但馬の情報誌 T2 (67号)』(2008年7月) 4～7頁。
- 19) 永楽館の復原地をめぐる論争については、今回(2017年7月6日)のヒアリングで出石城下町を活かす会会長の建築家の福岡隆夫氏から具体的な地名をはじめ論争の内容をお聞きできたが、本文でもお断りした通り、諸般の事情を考慮し省略したい。
- 20) 2017年7月における出石町の現地調査の際に、永楽館館長の赤浦氏からいただいた入館者数などの貴重な内部資料を参考にしたが、支障のないデータのみ取り上げた。
- 21) 2015年に実施された「第8回 永楽館歌舞伎のアンケート結果」(豊岡市出石振興局地域振興課)を参照のこと。なお、主な項目については第7回の永楽館歌舞伎のアンケート結果との比較もあるが、大きな違いが見られないため省略した。

主な参考資料

- 赤在義信著(石原由美子・川見章夫・瀬戸谷皓編)『但馬の城下町 出石を歩く』(地域の歴史文化を伝える会、2011年)
- 芦田徹郎「よみがえる芝居小屋—その社会学的研究序説—」(『甲南女子大学研究紀要 人間科学編』52号、79-92頁、2016年)
- 井口貢編『観光文化と地元学』(古今書院、2011年)
- 出石町振興計画審議会『出石町振興計画 “情緒と文化の息づく豊かで住みよい活力のある町”』(出石町、1977年)
- 出石町編集・発行『広報いずし』(77号～479号)(1957年～2005年)
- 出石町史編集委員会編『出石町史』(全4巻)(出石町、1984年～1993年)
- 出石町史編集委員会編『出石町史 年表(別冊)』(出石町、1995年)
- 伊藤友久「農村舞台から芝居小屋へ—信州における劇場転換期の一様相—」(『長野県立歴史館研究紀要』第11号、38-49頁、2005年)
- 上坂卓雄他編『静思塾報 創刊号』(静思塾、1985年)
- 上坂卓雄他編『静思塾報 第17号』(静思塾、1999年)
- エスプラナード編集室編『エスプラナード No. 38 春号 特集 現代修景術 景観整備の手法とプロセス 兵庫県出石町』(INAX、1996年)
- 太田智子他編『一度は訪れたい小京都』(竹書房、2014年)
- 片岡愛之助・清水まり『愛之助が案内 永楽館ものがたり』(集英社、2015年)
- 「角川日本地名大辞典」編集委員会『角川日本地名大辞典28 兵庫県』(角川書店、1988年)
- (株)キャメル編『永楽館 復原の軌跡 永楽館復原工事報告書』(豊岡市教育委員会、2009年)
- 木村礎・藤野保・村上直編『藩史大事典 第5巻 近畿編』(雄山閣出版、1989年)
- 草柳大蔵『斎藤隆夫 かく戦えり』(文藝春秋社、1981年)
- コーブラン・福岡隆夫建築事務所編『伝統的町家建築の意匠構成の手引き(町家デザインマニュアル)』(出石町、1992年)
- 講談社編『図説 日本の鉄道クロニカル 第7巻 鉄道黄金時代「ディスカバー・ジャパン」の光と影』(講

- 談社、2010年)
- 国府村誌編集委員会編『国府村誌 中巻―近世編―』(日高町国府地区公民館、1962年)
- 佐藤滋・城下町都市研究体『新版 図説城下町都市』(鹿島出版会、2015年)
- 松竹関西演劇部編『永楽館柿落大歌舞伎』(豊岡市、2008年)
- 松竹関西演劇部・豊岡市編『近畿最古の芝居小屋 出石永楽館』(豊岡市、2013年)
- 全国京都会議監修『小京都を訪ねる旅』(講談社、1991年)
- ゼンリン編集・発行『ゼンリン住宅地図 兵庫県出石郡出石町』(1980年～2004年)
- ゼンリン編集・発行『ゼンリン住宅地図 兵庫県豊岡市』(2005年～2016年)
- たかテレビ制作『DVD 中央公民館播州歌舞伎クラブ 出石永楽館公演』(多可町中央公民館、2015年)
- 但馬ふるさとづくり協会編集・発行『但馬の情報誌 T2 (67号)』(2008年)
- 但東町教育委員会編『但東町の文化財 第2集 但東の農村舞台』(但東町、2001年)
- 徳永高志『芝居小屋の二十世紀』(雄山閣出版、1999年)
- 豊岡市編集・発行『広報とよおか』(創刊号～265号)(2005年～2017年)
- 豊岡市教育委員会編『出石城下町のまちづくり 豊岡市出石伝統的建造物群保存地区 まちづくりの手引き』(豊岡市、2009年)
- 豊岡市出石振興局地域振興課「第8回 永楽館歌舞伎のアンケート結果」(豊岡市出石振興局地域振興課、2015年)
- 豊岡市史編集委員会編『豊岡市史 上巻』(豊岡市、1981年)
- 日高町史編集専門委員会会議編『日高町史 上巻』(日高町、1976年)
- 藤岡和賀夫編『DISCOVER JAPAN 40年記念カタログ』(PHP 研究所、2010年)
- 古田清久「出石の観光まちづくり (連載記事)」(『まちづくり情報サイト』、2012年2月24日～3月16日)
- 文化庁編『歴史と文化の町並み事典』(中央公論美術出版、2015年)
- 兵庫県立歴史博物館編『開館記念特別企画展「播州歌舞伎」図録』(兵庫県立歴史博物館、1983年)
- マックス・ウェーバー (安藤英治編・梶山力訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』(未来社、1994年)
- 宮脇檀建築研究室編『コモンで街をつくる 宮脇檀の住宅地設計』(丸善プラネット、1999年)
- 名生昭雄編『兵庫県の農村舞台』(和泉書院、1996年)
- 柳町今昔物語編集委員会編『【但馬国出石城下町】柳町今昔物語～我がまちの歴史を未来へ』(柳町の歴史文化を伝える会、2014年)
- 吉野祐太・川島和彦「兵庫県豊岡市出石町における観光まちづくりの変遷に関する研究」(『平成24年度 日本大学理工学部 学術講演論文集』407-408頁、2012年)

(原稿受理日 2017年8月31日)